

# 五島列島の疱瘡墓について（Ⅱ）

The Study of Smallpox Tombs in the Goto islands（Ⅱ）

野上 建紀  
賈 文夢

Nogami Takenori  
Jia Wenmeng

# 五島列島の疱瘡墓について（Ⅱ）

長崎大学 野上 建紀

長崎大学 賈 文夢

## The Study of Smallpox Tombs in the Goto islands（Ⅱ）

Nogami Takenori (Nagasaki University)

Jia Wenmeng (Nagasaki University)

### Abstract

This paper is the research report on smallpox tombs located in the Goto archipelago, Nagasaki prefecture. During the Edo period, smallpox patients in the Goto archipelago were forcibly isolated deep in the mountains, on the coast, or on remote islands. Most of the patients died while in isolation and were buried near the isolation site. Their graves have been found in various places in the Goto archipelago. This paper introduces the graves of smallpox patients and the burial grounds of those who died of epidemics other than smallpox on Fukue Island, Nakadori Island, and Kashiragashima Island, analyzes their location and distribution, and examines their relationship with Hidden Christian graves.

**Keywords:** Smallpox tomb, Goto islands, Hidden Christian graves

### はじめに

天然痘は、種痘が普及して感染が抑制されたことによって根絶するに至るまで、その感染力の強さと致死率の高さにより非常に恐れられた伝染病であった。江戸時代の都市部では毎年のように流行する常在病として存在し、小児に多くの犠牲が出る病気であった。都市部を離れた地域では状況が異なっていたが、それでも数年に一度はどこかで大流行していた。一方、天然痘が流行しないとされていた土地もあった。そうした土地を香西は無痘地とよんでいる（香西2019）。九州では大村、天草とともに五島が無痘地であった<sup>1</sup>。しか

<sup>1</sup> 熊本藩細川侯の侍医・村井琴山が天明8年（1788）に疱瘡に関連した書物をまとめた『疱瘡問答』では、平戸も無痘地とされている（香西2019：79）。

し、無痘地と言っても天然痘患者が存在しないわけではなかった。その証拠に大村、五島には天然痘に関わる多くの石造物が残っている（賈 2022）。今回のテーマである疱瘡墓もその一つである。

今回は五島列島に所在する疱瘡墓の他、原因は明確ではないものの、疫病によって亡くなった人々の墓地である可能性が高いものについても紹介を行う。なお、天然痘の日本語の学名は「痘瘡」である。「疱瘡」、「豌豆瘡」、「裳瘡」などとよばれ、古文書などでは「痘」とのみ記されていることもある。本論では主に疱瘡という言葉を用いる。

## 1 研究の背景—無痘地と「送捨て」—

無痘地では独特の習俗がみられた。香西は、無痘地での習俗について「遠慮」、「送捨て」、「逃散」の3つを挙げている（香西 2019）。「遠慮」とは疱瘡の罹患者およびその親族に対して外部との接触を禁止する措置である。特に疱瘡の免疫を獲得していない土地の領主やその後継者に近接することを禁止する措置である。「送捨て」とは疱瘡患者を人家から離れた土地の仮設小屋に収容して隔離することである。「逃散」は疱瘡罹患者を連れて本国を離れることである。「送捨て」などの隔離政策から逃れるためと言われる。同じく本国を離れる習俗としては、他に「他国養生」がある。これは文字通り、本国を離れて他国で治療や養生を行うものである。つまり、無痘地は疱瘡患者が存在しないのではなく、徹底的に疱瘡患者を隔離し、排除することで無ウイルス状態を保とうとした結果である。しかし、それでも感染を封じ込めるのは困難であり、実際には多くの犠牲者が出ている。

こうした習俗がいつから始まったか明らかではないが、16世紀後半にはすでに香西が挙げた「遠慮」と「送捨て」の習俗があったことがルイス・フロイス（1532-1597）の著作『日本史』の記述でうかがえる。五島の天然痘について、フロイスは1566年ごろとされる地誌情報として次のように述べている。

日本では天然痘が珍しくないが、五島の人々はこの病を（ちょうどわれわれがペストを毛嫌いするように）忌み嫌う。そのため妻子や夫・家族が罹患すれば、家を出して連絡を断つ。どういうことかというと、人里離れた林の中に藁小屋を建てて、病人が死ぬか完治するまでそこで治療し、食べ物を運ぶのである。完治した後も、殿と接したり殿に仕官したりする人間であれば、一定の月数が経つまで屋敷に入ることは許されない。

(フロイス2000：199-200)。

そして、無痘地では疱瘡患者は死後もまた隔離されることになる。疱瘡病死者は先祖伝来の墓地には埋葬されず、多くは疱瘡小屋の近辺に墓地が形成されたと推定される。これが「疱瘡墓」である。そのため、単に疱瘡が死因である者の墓というものではない。隔離などを伴った疱瘡病死者の墓である。つまり、主に「送捨て」という無痘地政策が生んだ墓である。

## 2 研究の目的と意義

本研究の目的は、「送捨て」という無痘地政策が生んだ五島列島の疱瘡墓を探索し、現地調査を行い、その特質を抽出しながら、無痘地の実態を明らかにすることである。

現在、疱瘡墓については、その実態はもちろん位置すら十分に把握されていない。人里離れた隔離地であったことに加え、長い間、忌避された存在であったためである。そのため、本研究の意義はまず疱瘡墓の基礎資料の収集による現状把握と言える。これにより疫病への対応や疫病によって生み出された隔離と差別を伝える文化遺産としての価値を評価することができる。そして、疱瘡墓の有様は、疱瘡への対処の形態が反映されており、疱瘡墓の分析から導き出される無痘地の実態は、地域がどのように深刻な疫病と対峙してきたか、知る手がかりとなる。疫病対策史の研究としても意義がある。

## 3 調査の経緯

2020年、長崎県波佐見町教育委員会より受託し、『「波佐見町の文化的景観」に関する基礎調査』を行った(野上・賈 2021a)。その際に波佐見町中尾郷に所在する二つの疱瘡墓の調査を行った(野上・賈 2021b)。それを契機に筆者らは長崎・天草地方の疱瘡墓の基礎資料収集と調査研究にとりかかった。そして、その成果をもとに2022年3月5日に長崎・天草地方の疱瘡墓をテーマにした「感染症と考古学」研究会(共催：長崎県考古学会)を開催した。大村周辺、波佐見、五島、天草の疱瘡墓を中心に文献史学、民俗学、考古学のそれぞれの学問分野からアプローチを試みた研究会であった。多くの参加者があり、その際、疱瘡墓に関する情報も寄せられた。本文はそれらの情報に基づいて行った調査の

成果を報告するものである。

五島列島の疱瘡墓については、すでに現地調査内容を一度公表している。前回は福江島の南河原と前島江ノ浦の疱瘡墓の報告を行ったものであり（野上・賈・石橋 2022）、今回は、福江島の握りの浜と内閣、中通島の赤波江、頭ヶ島について報告を行う。また、その他の疫病に関する墓地についても報告する。

#### 4 調査地の地理的・歴史的環境

五島列島は東シナ海に浮かぶ九州の西方に連なる島嶼群であり（図1）、長崎県に属する。長崎県本土との間には五島灘が広がっている。遣唐使の日本最後の寄泊地であったことや中世には倭寇の頭目である王直が活動拠点を置いた（本馬 2021）ことが示すように古来より大陸との交易や交渉の上で重要な位置にあり、海上交通の要衝としての役割を果たしてきた。そして、今回、調査を行った島は、福江島、中通島、頭ヶ島である。

福江島は五島列島最大の島であり、長崎県五島市に属する。藩政期は福江藩と富江領から成り立っていた。富江領は福江藩から分知されたものである（中島 1973）。福江藩は五島列島の大半を治めた藩であり、石田城と城下が現在の市街地の基礎となっている。福江藩領の疱瘡墓については、福江島東海岸に位置する南河原の調査を2021年8月に行っている。今回は同じ福江藩領の内閣、ぜんじゃが墓、そして、富江領の握りの浜、貝ノ瀬海岸、山崎の石塁（勘次ヶ城）付近の調査を行った（図2）。

中通島は五島列島の中部に位置し、福江島に次ぐ大きさをもつ（図22）。全島が長崎県南松浦郡新上五島町に属している。この中通島の沖合には祝言島や頭ヶ島などの疱瘡患者を隔離するための島がある（本馬 2021：190）。

祝言島は新上五島町に属し、中通島の西部の青方港の沖合に位置する無人島である（図23）。頭ヶ島も同じく新上五島町に属しており、中通島の東に突き出た半島の先端沖に位置する島である。中通島と頭ヶ島大橋で結ばれている。幕末に潜伏キリシタンが迫害を逃れて移り住んだ島として知られる。頭ヶ島の集落は世界遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」に選ばれており、潜伏キリシタンの島として「上書き」された感があるが、江戸時代は疱瘡患者が隔離地として利用された無人島であった。送捨ての島であり、疱瘡墓の島であった。

## 5 五島列島の疱瘡墓

### (1) 福江島握りの浜

2022年5月5日、竹野市朗、永治克行、阿野さなえと筆者らの5名で福江島の南海岸の握りの浜付近の疱瘡墓の調査を行った（図5・10）。握りの浜は、五島市富江町長峰に位置し、富江町の中心部の西方の丸子集落の丸子海岸の西側にある。浜から南方に津多羅島を望める位置にある（図4）。国道384号線から海岸の方につながる脇道に入り、海岸近くまで下りたところに疱瘡墓がある（図6・7）。海岸への道の建設によって墓地は削られ、分断されている。

墓地には石組墓が点在しており、墓碑銘をもつ柱形の墓石や地蔵も10基程度、確認できる。石組墓は丸石などを組み合わせたものであり、柱形の墓石などの基部となっているものもある。また、板石を組み合わせた石祠に仏像を納めたものもある（図8）。没年がわかる病死者の墓石の中で最も古いものは、天保13年（1842）である。その墓石は正面に「大婦人平田氏之墓」、正面からみて右側の側面に「含章院貞香妙清大姉」、残る2面に下記のように刻まれている（図11）。

王母名利惠古平田自仙翁之女（欠損）

我王父伯圭府君操行貞淑端正不

惜（情の可能性もあり）府君職業繁劇不暇寧居婦人常

守家上奉二尊下教兒女兒女畏之

如嚴君生五男四女晚患痘瘡令不

得養家長子永世君隨療病於此地

医療備至然歳已晩老病甚險不得

効遂没於此地法不得歸葬空於握

山之陽干時天保十三壬寅歳七月

七日行年五十有六歳

被供養者は「痘瘡」に罹って、「握山」で治療を受けたが、効果なく亡くなり、帰ることができずに埋葬されたことが記されている。この地に疱瘡墓だけでなく、「疱瘡小屋」

もあったことがわかる。

また、最も新しい没年は明治3年（1870）である（図16）。これまで発見されている疱瘡墓の中では最も新しいものである。一方、大村藩領で最も新しい没年の疱瘡墓は、波佐見の湯無田墓地（仮称）の嘉永2年（1849）の墓である。また、最も数多く墓石が発見されている大村城下の付近の黒岩墓地の墓の中で最も新しい没年の刻銘は弘化3年（1846）である。久田松和則は、この黒岩墓地の没年の刻銘について、長与俊達による牛痘接種が始まる嘉永2年（1849）以降の墓石は全く見当たらないことから、牛痘接種の効果が現れ死亡者が出なくなったことを示しているとする（大村市史編さん委員会（編）2017）。一方、握りの浜の没年の刻銘は嘉永2年より新しい1860年代に集中している。種痘の先進地である大村とそうではない五島では、種痘の普及度が異なっていたことを示している可能性がある。

## （2）福江島内閣

五島市籠淵町内閣に位置する。2022年5月7日、筆者らは内閣ダム周辺の疱瘡墓の探索を行った。『福江市史（上巻）』には、福江では、疱瘡が流行した時、士族の人は南河原に、士族以外の方は内閣に捨てられていたとある（福江市史編集委員会 1995：771）。そして、当時、行われていた対策方法も書かれている。1970年に内閣ダム（図17）が建設される以前は、小さな盆地（図18）であった。その中央には大きなタブの木があり、その木の下に疱瘡患者が捨てられていたとされる。生き延びた人はまず内閣から水道口という小さな里で食物をもらい、これを「一番癒り」と呼んでいた。回復した人は、次にアカノタケと言う里に入り、そこで体を洗うことが許され、これを「二番癒り」と言った。さらに、ヒキダ（図20）という場所で長く養生し、もう伝染しないと判断されると福江城下に入る事が許され、これを「三番癒り」といった。疱瘡で死んだ人は内閣と水道口（図19）の間に墓地があり、そこに葬られたと伝わっているが、現地踏査では確認できなかった。そして、疱瘡患者が隔離されていた場所は内閣ダムに水没した可能性がある。

## （3）中通島赤波江共同墓地

赤波江集落は中通島の北部、南松浦郡新上五島町立串郷に所在する。中尾篤志氏のご教示によれば、赤波江教会の共同墓地で、棚田状の墓地の最下段に、集石墓とともに疱瘡墓であることを記した小さな立碑があったという。そこで2022年8月8日、筆者らは赤波江

教会、共同墓地の周囲の瘡瘡墓調査を行った。赤波江の共同墓地の場所は赤波江教会から北東側約200メートルの位置にある（図30）。海岸まで下りた道の脇にある。十字付き墓碑（図36）と石組墓（図37）のキリシタン墓、キリスト教信者の墓が多く見られる。そして、その棚田状の墓地の最下段に瘡瘡墓がある（図31）。海岸から陸側へ約50メートルのところにいる（図38・39）。道路脇の石垣の上に1基の瘡瘡記念物と15基以上の瘡瘡墓が確認できる（図40）。瘡瘡記念物の正面には「供養塔」、正面からみた右側の側面には「弘化四丁未歳十二月領主建之焉」（1847）の文字が刻まれている（図41）。

瘡瘡墓はおおよそ前後二列に並び、主に柱形の墓石であり、不定形のもので1基みられる。柱形の墓碑正面には戒名、側面は没年月日を刻まれているが、風化の為文字は読み取りにくい。読み取れた文字は次の通りである（■には俗名の苗字が入る）。

- 1号墓「慈心院廣譽妙延大姉 天保十三寅年十一月□一日 光品妻 ■■■文」（1842）
- 2号墓「白石鏡圓大姉 武石好琢母 俗名政」
- 3号墓「華光院釋□□ 天保□年四月十□日 □傳□ 三十才」
- 4号墓「清連院釈□如□誓大姉 天保十三年 寅十月十二日 ■■■」（1842）
- 5号墓「寛岳妙□信女 文□二年亥天 四月五日 十四・・」
- 6号墓「歸真釈妙證信女位 天保十三寅十一月十一日」（1842）
- 7号墓「釈□□妙善大姉 天保十三寅年十一月三日 ■■■□」（1842）
- 9号墓「□真嶺□眩信女位 文久二戌天 八月十二日」（1862）
- 10号墓「寒・・・瑞・・・ 天保□・・□月□日」（1830～1844）
- 12号墓「似首村・・」
- 13号墓「天保十二丑年一月十六日 同年同月九日」（1841）
- 14号墓「釋智清圓光信士 文久三癸年正月廿九日 ■■■四次八」（1863）

没年がわかる病死者の墓石の中で最も古いものは、天保12年（1841）である。その墓石は正面の文字が読み取れないが、側面には複数の没年月日が刻まれており、複数の病死者が供養されている。天保12年（1841）から13年（1842）にかけて7名が亡くなっている。そして、最も新しい没年は文久3年（1863）である。大村藩領で発見されたいずれの瘡瘡墓よりも没年が新しい。この墓地は20年以上存続したことがわかる。

また、不定形の墓石の正面には「似首村（欠損）」が刻まれている（図53）。似首集落は、



赤波江集落がある新魚目の半島の付け根側にあり、赤波江共同墓地から南へ直線距離で10キロほど離れた場所に位置する。この墓地に埋葬された人々の居住範囲を知る上で重要である。被葬者の居住地が刻まれた例はこれまで五島藩領では確認されておらず、大村藩領の黒岩墓地で多くみられるものである。地名を刻むことについて、久田松和則は、黒岩墓地で広い範囲の領民に対し山揚げや疱瘡の治療・予防が行われていた様子が窺えるとする(大村市史編さん委員会(編)2017)。

#### (4) 祝言島

祝言島は、中通島の西側沿岸の青方港の沖合に浮かぶ島である(図22)。東西に長く、青方港の天然の防波堤の役割を果たしている。文政2年(1819)に瀬戸内から戻って疱瘡を拡散させた者たちがこの島に隔離されている(橋村2021)。このことについては次の宮本常一の記述に詳しい。

文政二年(1819)12月、魚目の熊蔵という者が青方の船で備前岡山へゆき、そこで疱瘡にかかって死んだ。その翌年1月丸屋慶吉の船で、これもやはり岡山へ出かけて行った山下多次兵衛も、そこで疱瘡で死んだ。多分この多次兵衛の弟と思われる山下多三郎は、兄の死骸をとり岡山へ出向いたらしく病を得て平戸で死んだ。この菌はやがて島にもたらされ、多三郎の妻が祝言島に隔離されてそこで死んだ。多三郎の子喜市も母におかれること一月にして祝言島で死んでいる。(中略)このようにして山下氏は絶えている(宮本1972:56)。

#### (5) 頭ヶ島ダンパ平

頭ヶ島は中通島の東沖に位置しており、島の東側には上五島空港がある。島内の白浜には世界遺産に登録されている頭ヶ島天主堂がある。この島のすぐ北にはロクロ島(図23)があり、いずれも宮本常一によれば、「埋葬の島」であり、「ハウソのことをダンパというが、島にはダンパ平という所がある。そこへハウソで死んだ人をたくさん埋めたようである」(宮本2015:155)と記している。ハウソとは言うまでもなく疱瘡のことである。このダンパ平が頭ヶ島とロクロ島のいずれの島にあったのかははっきりしない部分もあるが、全体の文脈から考えると、頭ヶ島にあったと判断される。

また、頭ヶ島の埋葬地について、宮本はさらに「つい最近まで、お盆になると有川の西

の蛤あたりから墓掃除に来ている家が多かったが、戦後、お骨を掘ってもってかえり、島への墓まいりはなくなった」(宮本 2015: 155)と書いている。宮本が頭ヶ島に渡ったのが昭和37年(1962)8月であるため、文中にある「つい最近」というのは1950年代頃のことではないかと思われる。その頃まで墓掃除や墓まいりが行われていたとなると、墓石等もあったのであろう。1950年代頃まで墓参りが行われていた埋葬地(墓地)とダンバ平が同じ場所であるのか、離れた場所であるのか、明らかではない。

## 6 五島列島のその他の疫病の墓など

### (1) 福江島ぜんじゃが墓

五島市三井楽町濱ノ畔字桐ノ木に所在する。飢饉や疫病などで亡くなった者の墓と伝わる一方、キリシタン墓との説もあり、詳細は不明である。なお、『三井楽町郷土誌』には、「ゼン者が墓」と表記されている(三井楽町 1988: 661)。

墓は石組や石積みの墓であり、方形に石を組んだ中央に立石を置いた形式のものが多い(図58)。墓石で没年がわかるものはなく、石積墓の積み方は天草市の貢山で発見された疱瘡墓(図59)の積み方と似ている。ほぼ正方形の石積みの中央に無字の立石がある。そして、墓地中央には「小嶋みや建之」と刻まれた地蔵像が建立されている(図60)。地蔵像の周囲は供養用の仏器が散らばっている。

### (2) 福江島貝ノ瀬海岸

五島市向町に所在する。『崎山村の歩み』の「三二 古墳古蹟の項(三)」には「明治一九年三月堀脇チヤが天然痘を福江より伝染したのに端を発し全村域に互り蔓延し凡そ一〇〇名の死亡者続出し、村人はその伝染をおそれてこれを貝ノ瀬海岸に埋葬した。現に雑草に覆われた小さい自然石の墓が無数に風雨にさらされて当時の惨状を物語っている」(崎山村カ 1954)とある。しかし、現地にある供養碑(図61)の碑文には次のように書かれている。少し長くなるが、全文を掲載する。

明治十九年(一八八六)、日本列島全土に襲いかかった虎烈羅病は、遠く五島灘を渡り五島列島福江村に上陸、猛威を振るいつ、遂に郷土上崎山村に波及する。元来、獐猛なるコレラ病は、恰も遼原の火の如く止まる処なく、間髪を入れず崎山村全域に蔓延した

のである。当時、全国的に未だ医療及び衛生に関する施設、知識は殆ど皆無に近く、官憲を初めた役人一同、只周章狼狽し拱手傍観する他になかったと言う。斯かる中に在って、罹災者は、日毎にその数を増し、遂にはその犠牲となり、尊き一命をも亡なう悲しい一大事変と発展したのである。今日は三人、明日は五人、時として十人程にも達したと言う。而して是等の犠牲者は、若い衆と呼ぶ村の奉仕グループの手を借り、雨戸板に乗せ官憲指示のまゝ、遠く村里離れの当地海岸に、犬猫の死骸同様に埋葬されたのである。中には意識もあり息絶え絶えにして両手を合わせ、遂行の阻止を嘆願する者もあったとか。悼しい哉！此の惨事、只筆舌に苦しむのみ。斯くして、此の年の九月、秋風も吹き初める頃迄に犠牲者の数は、故 [削除]、全畑中犬之助を含む凡そ百人と言われ、崎山村有史以来の大惨劇に終わった。然も斯くの如き一大事変も悪疫と云う名の下に、世に伝聞される事こともなく、遠く百有余年歴史の彼方に消え失せようとしている。茲に於て、此の地を貝の瀬霊地と呼称し、此処に御鎮まります御霊を弔敬し、崎山町の平和的繁栄、更に悪疫再現の防止、□んでは当海岸沖を航行する船舶の安全等を祈願する趣意の下、崎山町出身者の温かい御支援の上に立ち、慰霊碑を建立し斯かる歴史的事実を永く後世に伝えんとすることは、天界に御鎮まります御霊に対する至高の饞とならん。平成元年八月吉日 南風さわぐ貝ノ瀬鼻の白波に散りて失せにし御魂悼まん 慈海

このように明治19年（1886）に福江島の崎山を襲った病災は、疱瘡ではなく、コレラであったとみられるが<sup>2</sup>、疫病が流行して大量に犠牲者が出た場合の遺体の処理の方法は同様のようである。なお、明治期の疫病の流行に関する慰霊碑として、新上五島町の江孕墓地の一角に旧有川村を襲った伝染病の予防救治に奔走し、明治11年（1878）7月13日に殉職した巡査小西喜代三（享年25歳）の慰霊碑が残る（図62）。明治11年も長崎県下でコレラが流行した年であり、この疫病もコレラである可能性が高い<sup>3</sup>。

### （3）福江島山崎の石塁（勘次ヶ城）付近

五島市富江町岳に位置する。山崎の石塁（勘次ヶ城）（図63）に隣接した林（図65）の中から数百体の人骨が発見されている。『富江村郷土誌』には、「勘次ヶ城と人家との中間凡そ二三町の處は三百年以前の墓地なりし処現今防風林として松樹を移植し一見墓地たる

<sup>2</sup> 明治19年（1886）には長崎県下で疱瘡患者1,087人、コレラ1,927人発生している（長崎県医師会 2004）。

<sup>3</sup> 長崎県下で患者1,854人、死亡511人が出ている（長崎県医師会 2004）。

観なきも嘗て畑に入れる砂を採らんとして此処を発掘せる際數百体の人骨を發見せり而も地域の状況より推測すれば尚多數の人骨埋没せりとなすも敢て誤断に非ずと信ず」(富江村カ 1918: 118)と記されている。

これらの大量の人骨の由来ははっきりしないが、疫病で亡くなった人々のものである可能性も考えられる。地理的な環境はコレラ罹災者が埋葬された貝ノ瀬海岸と類似している。いずれも海に突き出た半島部の突端の海岸部に位置している。町や集落から最も遠のいた場所である。

瘡瘡墓として継続して利用された土地であれば、何らか言い伝えの形でも残されていると思われるので、伝承も残されていないとなると貝ノ瀬海岸のように一度の病災によるものであるかもしれない。

#### (4) 頭ヶ島白浜遺跡

頭ヶ島白浜遺跡は、頭ヶ島北側の海岸に立地し(図27・28)、南松浦郡上五島町友住郷に位置する。古い地籍図によれば、明治10年代頃の海岸の砂丘一帯の3筆(白濱 602・650・651)について、地目が墓地であるとして色が塗られている(図25)。その内、東側の1筆(白濱 602)の一部が現在のカトリック墓地の位置にあたとみられ、残る2筆が頭ヶ島白浜遺跡にあたる。

縄文時代の土器や石器が出土する遺跡であるが、江戸時代の埋葬遺構とそれに伴う遺物が出土している(有川町教委 1996)。発掘調査報告書によると、近世埋葬遺構からは45体の埋葬人骨が確認されており、埋葬方法は土坑墓・木棺墓・カメ棺墓などがあり、埋葬姿勢には伸展葬・座葬・屈葬などがある。45体の内訳は、成人男性16体、成人女性11体、子供7体である。副葬品は少ないが、数珠・六道銭・かんざし・小壺などがあり、これらの遺物により近世墓であることがわかった。

報告書では、現在の白浜地区の人々の墓が調査区の東側にあり(図29)、住民によって手厚い追善供養がなされているのに対し、出土した近世墓地はすでに無縁化していること、さらに白浜地区の人々が近世末に入植したキリスト教信者の末裔であるのに対し、仏教的な要素をもつ遺物が出土していること、また、近世の頭ヶ島は無人島であったといわれることなどから、被葬者は島外の人々と考えた方が妥当としている(有川町教委 1996)。さらに埋葬の契機については、被葬者が本貫地の墓地に埋葬されないことからいくつか推論も成り立つとしながら、結論は出していない。ここで言う推論とは、頭ヶ島が瘡瘡患者の

隔離地であったから疱瘡墓の可能性をもつというものであろう<sup>4</sup>。疱瘡墓である確定的な証拠が出ているわけではないが、いずれにせよ何らかの疫病の犠牲者が埋葬されたものと推測される。

## 7 考察

### (1) 海岸部の疱瘡墓等の類似性（福江島富江の握りの浜、中通島の赤波江集落）

今回、調査を行った握りの浜や赤波江墓地は、同じ福江島内の南河原の疱瘡墓と環境が非常によく似ている。礫や小石を多く含む浜であり、背後に急傾斜地が迫っている。そして、疱瘡墓は傾斜地の中にある。疱瘡墓の場合は、隔離施設である疱瘡小屋に付随する形で形成されたと考えられるが、まだ海岸部の疱瘡小屋の位置や環境はいずれの場所でも特定されていない。天草にも海岸部の外平に疱瘡小屋があったことが記録にあるが、その正確な場所は不明である。

また、貝ノ瀬海岸と山崎の石罟（勘次ヶ城）付近もよく似ている。市街地との位置関係や半島の突端という地形の様相も共通である。また南河原や握りの浜の墓地と異なり、砂丘が近くに位置している。つまり、一度に多くの遺体を埋葬しやすい土質である。貝ノ瀬海岸では約100人が埋葬され、山崎の石罟（勘次ヶ城）付近では流行の回数は不明であるものの、数百人の人骨が発見されている。疱瘡小屋のような隔離施設・治療施設があるわけではなく、大量の犠牲者が出たために緊急的に埋葬地として選んだものとみられる。

福江藩領の南河原と貝ノ瀬海岸、富江領の握りの浜と山崎の石罟（勘次ヶ城）付近、それぞれの藩や領内に性格の異なる埋葬地をそれぞれ有していることは興味深い。

頭ヶ島白浜遺跡も何らかの疫病の犠牲者が埋葬された場所とみられる。南河原や握り浜のような疱瘡墓であったか、あるいは貝ノ瀬海岸のような緊急的な埋葬地であったか、明らかではない。立地を考えると、他に砂丘を疱瘡墓とした例がないため、後者の可能性が考えられるが、頭ヶ島が疱瘡患者の隔離地であった背景を考慮すると、前者の可能性も十分にある。宮本常一が著すダンパ平が白浜の埋葬地を指すのであれば疱瘡小屋を伴う継続的な疱瘡墓とみてよいが、そうでない場合は疫病死者が出た場合にその都度、埋葬された墓地である可能性が高い。いずれにしてもダンパ平の特定が必要である。改めて聞き取り

<sup>4</sup> 近代の墓碑として「川崎清之 つる まつ」、「中山つる」の銘をもつものが発見されている。疱瘡墓の場合、戒名を刻まずに俗名のみを刻むことがある。

調査を行うか、頭ヶ島全体の古地籍図を調査すれば、特定も可能であろうと考える。

## (2) 無人島の利用 (頭ヶ島、祝言島)

疱瘡墓の立地は大きく3つに分けられる。人里離れた山奥、海岸、そして、離島(無人島)である。本文でも頭ヶ島や祝言島のような無人島を隔離地として利用したことを述べたが、その他にも無人島を利用した例は少なくない。橋村修は次の例を挙げている。福江島富江の太郎島(多郎島)(図3)では、文久4年(1864)に疱瘡が発生した際に小屋掛けし、「逃藪」(避難所)がつけられた。天保8年(1837)、中通島飯ノ瀬戸村では144人の死者が出たため、村の目の前の串島に隔離している。五島以外でも天草などでも例がある。天保9年(1838)10月に天草下島楠浦村で疱瘡が流行し、同村内の本渡水道に浮かぶ錦島(二色島)へ小屋掛けし、病人を隔離している。なお、その後、この島の病人小屋について、本渡水道をはさんだ対岸の天草上島の下浦村から楠浦村と本戸組大庄屋へ苦情が出され訴訟となっている(橋村 2021)。

その他、奈留島沖の前島も隔離地であった可能性が高く(野上・賈ほか 2022b)、天草の下馬刀島は隔離地であることを示す歌詞の歌が伝わっている。

そして、橋村修は、山への隔離が主流であった感染者への対応が19世紀前半になると、地付きの無人島への隔離が見られるようになったことを指摘している(橋村 2021)。確かにその傾向は認められる。地勢に応じて立地が選ばれただけでなく、年代的な特徴を示している可能性がある。

## (3) 疱瘡患者と潜伏キリシタン(中通島の赤波江集落、頭ヶ島集落)

頭ヶ島は、疱瘡の島が潜伏キリシタンの島として「上書き」されたと述べたが、この上書きは偶然に引き起こされたものではない。疱瘡患者と潜伏キリシタンは全く別の存在ではあるが、ともに社会の視線が届かない場所が居場所となったことは共通である。疱瘡患者は感染予防のために社会から隔離され、潜伏キリシタンは禁教による迫害のために社会から逃れて潜伏した人々である。

そして、両者が重なり合う契機は潜伏キリシタンの移住であった。五島列島には大村藩領の外海地方から多くの潜伏キリシタンが渡ってきた(中島 1973)。18世紀後半、五島藩は台風、大火、虫害、疫病などの災害が相次ぎ、深刻な労働力不足に見舞われていた。その一方、大村藩では人口増加によって耕作地が細分化し、またキリシタン宗門改めも厳し

さを増していたのである。両者の思惑が一致し、寛政9年（1797）に「人送り協定」が結ばれたことにより、大村藩の農民が五島藩に海を渡って移住することになった。もちろん、その中には多くの潜伏キリシタンが含まれていた（中島 1973）。

それでは、外海から渡ってきた潜伏キリシタンはどこに移住することになったのか。福江藩では百姓について耕作を主体とする地方の他、浜方、竈に分けていたが、移住者は地方百姓としながらも、主に海浜の狭隘の地を与えられるため浜百姓を兼ねるものが多かった（木場田 1985）。また、潜伏キリシタンの中には「不毛の荒地や未耕地」を求めて開拓を努めるものもいた（内藤 1979）。そのため、移住先の一つが疱瘡患者の隔離地となることがあった。隔離地はもともと町や集落から離れ、隔絶した場所であり、未開地であり、無人の地であった。そういう場所であったため、先住者との大きな摩擦もなく入植することができたと考えられる。例えば、福江島の南河原周辺、前島の江ノ浦（野上・賈・石橋 2022）、そして、疱瘡患者の隔離地であることが知られている頭ヶ島もまた潜伏キリシタンの末裔が暮らすことになる土地である。本馬は疱瘡小屋があったところの近くに集落を営んだ理由として信仰を隠す意図があったと推測している（本馬 2021）。

前に述べたように種痘の普及の遅れから幕末に至っても五島では依然として疱瘡患者の隔離地は必要な存在ではあったが、それでも少しずつ隔離地としての役割を終えつつあったことも確かである。それもまた疱瘡患者の隔離地への移住が進んでいった背景にあらう。実際に頭ヶ島の場合は隔離地の役割を終えた後に移住が図られているようである。今後、疱瘡墓と潜伏キリシタン墓を比較しながら、両者の関係を明らかにする作業が必要である。

## おわりに

疱瘡墓については不明なことがまだ多い。まず位置の特定が難しい。疱瘡墓の現地調査にとっては地元の情報が非常に重要であるが、情報提供者も年々、高齢化している。もともと集落から離れて隔絶された環境であるため、仮におおよその位置がわかってもたどり着くのは困難である。そのため、情報だけでは発見できない場合も多く、現地での同行案内を必要としているのであるが、高齢のため身体上の理由で現地まで案内できない場合も多い。今回、報告した握りの浜の疱瘡墓も情報提供者の同行は無理な状況であった。現地を知らない者だけで辛うじて辿り着いたものである。

もともと疱瘡墓の情報はその性格上、表に出にくく、また、小さな行政やコミュニ

ティーの中では周知の情報であっても、市町村合併によって一つの行政の単位の規模が大きくなるとその情報が共有されなくなる。その結果、地域に埋もれた多くの痲瘡墓に関する情報が、博物館での事業や新しい市史や郷土誌の編纂などで郷土の歴史に関して公表されたり、公開される際にもこぼれ落ちて忘れられる恐れがある。情報提供者の高齢化と地域の過疎化が進む中で情報収集を急ぐ必要性を感じている。

## 付記

本研究は、2021・2022年度多文化社会学部・研究科の部局長裁量経費による「共同研究支援事業」の助成を受けて行ったものである。

## 引用・参考文献

- 有川町教育委員会 1996 『頭ヶ島白浜遺跡』 有川町文化財調査報告書第1集  
 大村市史編さん委員会(編) 2017 『新編大村市史』 第五巻 現在・民俗編 大村市  
 大村藩之醫學出版會 1930 『大村藩の醫學』  
 賈文夢 2022a 「肥前大村・五島の痲瘡関連石造物について」『多文化社会研究』 8号 267-283頁  
 賈文夢 2022b 「長崎・天草地方の痲瘡墓について」『感染症と考古学』 発表資料集 12-17頁  
 香西豊子 2019 『種痘という<衛生>近世日本における予防接種の歴史』 東京大学出版会 36-139頁  
 木場田直 1985 『キリシタン農民の生活』 葦書房  
 西海町教育委員会 2005 『西海町郷土誌』 昭和堂  
 崎山村カ 1954 『崎山村の歩み』 (複写本のため、発行者不詳)  
 酒井シヅ 2008 『病が語る日本史』 講談社学術文庫 1886 講談社  
 新魚目町・新魚目町教育委員会 1986 『新魚目町郷土誌』  
 関根達人 2020 『石に刻まれた江戸時代』 歴史文化ライブラリー 498 吉川弘文館  
 立川昭二 1984 『病いと人間の文化史』 新潮社  
 富江村カ 1918 (1951年改訂) 『富江村郷土誌』 (複写本のため、発行者不詳)  
 内藤莞爾 1979 『五島列島のキリスト教系家族-末子相続と隠居分家-』 弘文社  
 長崎県医師会 2004 [http://www.nagasaki.med.or.jp/about/history\\_02.htm#hl](http://www.nagasaki.med.or.jp/about/history_02.htm#hl) (2022年12月20日閲覧)  
 長崎県教育委員会 1999 『長崎県のカクレキリシタン』 長崎県文化財調査報告書第153集  
 中島功 1973 『五島編年史』 国書刊行会  
 野上建紀・賈文夢 2021a 『中尾郷の近世・近現代墓-2020年度「波佐見町文化的景観」に関する基礎調査(中尾山墓地編)-』 長崎大学多文化社会学部  
 野上建紀・賈文夢 2021b 「波佐見中尾山の「痲瘡墓」について」『金沢大学考古学紀要』 第42号 113-134頁  
 野上建紀・賈文夢・石橋春奈・田中正幸 2022 「長崎県時津町元村郷の「痲瘡墓」調査」『多文化社会研究』 8号 301-315頁  
 野上建紀・賈文夢・石橋春奈 2022 「五島列島の痲瘡墓について」『多文化社会研究』 8号 245-265頁  
 橋村修 2021 「江戸時代における疫病の水際対策」『疫病と海 海とヒトの関係学4』 西日本出版社 148-163頁  
 本馬貞夫 2021 『世界遺産キリシタンの里 長崎・天草の信仰史をたずねる』 九州大学出版会  
 フロイス・ルイス 2000 『完訳フロイス日本史』 9巻 (松田毅一・川崎桃太訳) 中央公論新社  
 三井楽町 1988 『三井楽町郷土誌』  
 宮本常一 1972 『中世社会の残存』 宮本常一著作集11 未來社  
 宮本常一 2015 『私の日本地図⑤五島列島』 未來社



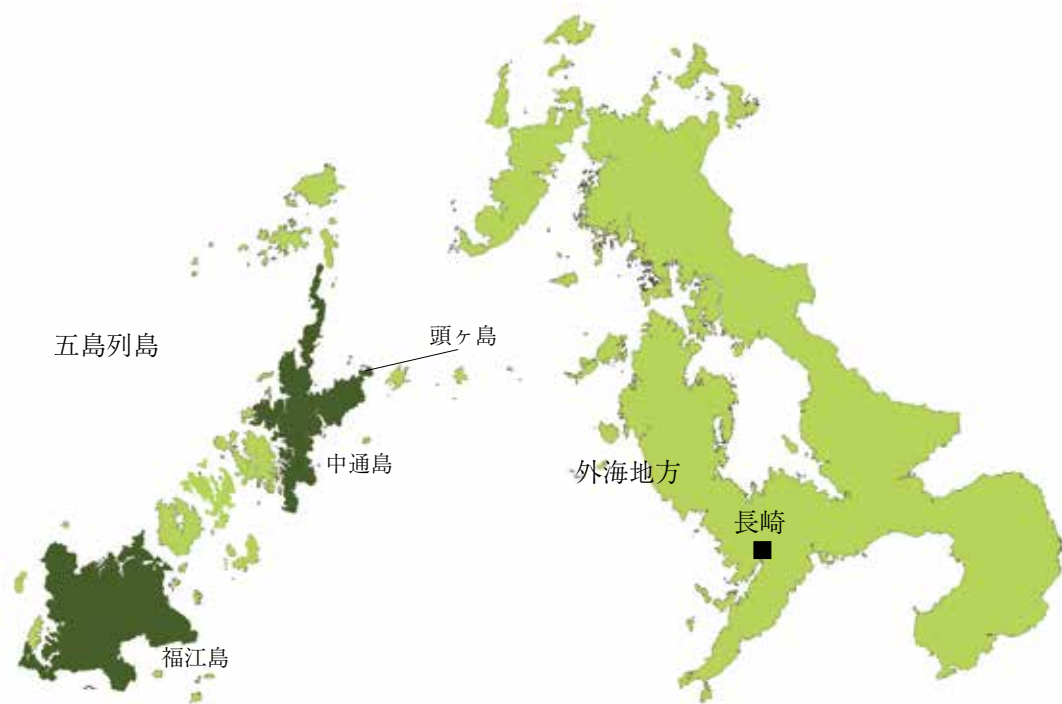


図1 福江島・中通島・頭ヶ島位置図



図2 福江島衛星写真



図3 多郎島



図4 握りの浜と津多羅島



図5 握りの浜（握山）墓地調査風景



図6 握りの浜（握山）墓地近景



図7 握りの浜（握山）墓地近景



図8 握りの浜（握山）墓地の祠と仏像



図9 握りの浜（握山）墓地の道路による削平部分



図10 握りの浜（握山）墓地調査後の記念撮影



図11 握りの浜（握山）墓地の大婦人平田氏之墓



図12 「元治元年十一月十九日」墓



図13 「元治〇年十一月七日」墓



図14 「文久二成年子十一月廿一日」墓



図15 「文久三年三月十九日」墓



図16 「明治三年午正月七日」墓





図 22 祝言島



図 23 ロクロ島



図 24 伊能図にみる 19 世紀の頭ヶ島とロクロ島



図 25 地籍図にみる明治 10 年代の頭ヶ島白浜



図 26 1962 年 8 月 12 日の頭ヶ島白浜 (宮本 2015 より)



図 27 頭ヶ島白浜 (写真中央付近が頭ヶ島天主堂)



図 28 頭ヶ島白浜 (写真中央付近が頭ヶ島白浜遺跡)



図 29 頭ヶ島白浜のカトリック墓地



図30 赤波江地区衛星写真



図31 赤波江地区墓地衛星写真



図32 赤波江教会



図33 赤波江地区近景



図34 赤波江地区の海岸



図35 赤波江墓地



図36 赤波江墓地のキリシタン墓



図37 赤波江墓地のキリシタン墓 (石組墓)



図38 赤波江推定抱瘡墓 (写真中央奥)



図39 赤波江推定抱瘡墓 (写真中央奥)



図40 赤波江推定抱瘡墓



図42 推定抱瘡墓 (1号)



図41 「供養塔」



図43 赤波江推定抱瘡墓 (2号)



図44 赤波江推定抱瘡墓 (3号)



図45 赤波江推定抱瘡墓 (4号)



図46 赤波江推定抱瘡墓 (左から5号・6号)



图 47 赤波江推定抱瘡墓 (7号)



图 48 赤波江推定抱瘡墓 (8号)



图 49 赤波江推定抱瘡墓 (9号)



图 50 赤波江推定抱瘡墓 (10号)



图 51 調査風景



图 52 赤波江推定抱瘡墓 (11号)



图 53 赤波江推定抱瘡墓 (12号)



图 54 赤波江推定抱瘡墓 (13号)



图 55 赤波江推定抱瘡墓 (14号)



图 56 赤波江推定抱瘡墓 (15号)





図 57 ぜんじゃが墓近景



図 58 ぜんじゃが墓の石積墓



図 59 天草貢山の抱瘡墓



図 60 ぜんじゃが墓内にある供養地蔵



図 61 貝の瀬の碑



図 62 有川郷江孕墓地の「長岑縣巡査小西喜代三之墓」



図 63 山崎の石塁（勘次ヶ城）



図 64 山崎の石塁（勘次ヶ城）に隣接する林